

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 3 月 31 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2009～2011

課題番号：21380024

研究課題名（和文） 地域における自然環境を基盤とする歴史的風致の評価手法に関する景観保全論的研究

研究課題名（英文） A Study on Evaluating Historic Amenities with Natural Environment For Regional Landscape Conservation

研究代表者

小野 良平 (ONO RYOHEI)

東京大学・大学院農学生命科学研究科・准教授

研究者番号：40272439

研究成果の概要（和文）：地域における神社の立地環境の特質を景観構造として評価し、これを地域の歴史的風致の保全に活かすための方法論を考察した。遥拝軸上の縦断地形を景観構造の指標として解析を行った結果、平地部で水系と強くかかわる神社において、縦断地形が遥拝点前面で平坦もしくは上昇し、背面では下降するというランドマークを成立させる景観構造の特徴が得られ、歴史的風致の維持のための土地評価に活用可能であることなどの知見を得た。

研究成果の概要（英文）：Evaluating characteristics of shrine's settings as landscape structure, we discussed their application for conservation of historic landscape in regional planning. Based on analyses by sectional landform of 145 cases of shrines and their surroundings, it was revealed that some shrines related water system in flat land are likely to stand on places with distinctive landform which emphasizes the shrine as landmark along with the worship direction. This feature is believed to be a useful index for land evaluation in regional conservation planning.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	3,300,000	990,000	4,290,000
2010年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2011年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	5,700,000	1,710,000	7,410,000

研究分野：園芸学・造園学

科研費の分科・細目：景観形成・保全

キーワード：景観 神社 風致

## 1. 研究開始当初の背景

平成 20 年に「地域における歴史的風致の維持及び向上に関する法律（歴史まちづくり法）」が制定された。これは歴史的環境を活かしたまちづくりを規制にとどまらず事業の支援によって進めようというもので、地域の景観形成に活用可能な制度として着目される。ところが本制度では「風致」という自然、歴史などを基盤にした生活環境のアメニ

ティ向上を目指しながら、その評価対象としての基盤をなすランドスケープ、特に自然環境（水系や緑地など）への視点が十分とはいえない。表層的な整備にとどまらない地域の総合的な景観形成・保全の実現のためには、この「歴史的風致」を適切に評価しその保全・形成に活かす計画論が求められている。

ここで歴史的風致の形成に深く関わる文化的資産として着目されるのは、社寺である。

特に神社については周知のように古来の自然信仰と関連してその立地には山岳・丘陵・森林をはじめとする自然環境との空間的な関係が存在することから、この関係性を適切に把握・評価することが地域の「歴史的風致」を共有する基礎的作業として求められる。しかし社寺の立地に関する景観計画的研究の現状は、いわゆる神体山を遥拝するような山岳・丘陵地・森林を背後に抱く立地形態はよく研究され知られているが、これ以外の様々な自然環境と結びついた立地が知られつつあるが不十分な状況にある。また神社は都市を代表する高格のものからローカルで低格のものにいたるまで幅広く存在し、身近な地域・地区のレベルでの歴史的風致の把握にも有効な指標となりうる。

## 2. 研究の目的

以上の背景のもと、本研究は地域における「歴史的風致」を神社の立地との関係から自然・歴史環境の特質として把握・評価し、これを当該地域の景観形成・保全に活用するための計画方法論を構築することを目的とする。具体的には、高格の神社およびその周辺地域、および一定地域内のローカルな神社群およびその周辺地域を対象に、その立地環境を構造化された景観として把握する調査を通して、歴史的風致としての神社とその周辺地域が形成する景観の特徴を整理し、地域の景観計画に活かす方策および課題について考察、議論することを目的とする。

## 3. 研究の方法

### (1) 基本概念の整理

神社の環境を指して「鎮守の森」として捉える傾向にある近年の環境価値論を相対化する必要から、用語としての「鎮守の森」のもつ性格について分析考察を行った。

### (2) 調査対象神社の設定

神社の立地の構造的特徴として、既に知られる神体山を遥拝するものとは異なる低地とそこに存する水系を遥拝する神社の存在に特に焦点をあて、事例調査の対象として河川や池沼に関係して立地する高格（式内社や旧社格における官幣大社等）の神社として広瀬神社（奈良県）、石清水八幡宮（京都府）、宇佐神宮（大分県）、氷川神社（埼玉県）を選定した。またローカルな神社群として、前記氷川神社周辺の一定範囲内の神社を網羅的に対象とした（141社）。

### (3) 景観分析・評価指標の設定

神社の立地環境に関わる景観を歴史的風致の保全へ活用可能な観点から把握する指標として、本研究では基本的な神社の信仰である遥拝行為の空間・景観形成上への現れ方

に着目した。特に遥拝という方向性を伴う行為のための空間が周囲の地形とどのように関係付けられているかを把握することでその景観的な構造的な捉えごととした。具体的には樋口忠彦（『景観の構造』技報堂1975）による景観の構造的把握法および上田篤（『鎮守の森の物語』思文閣2003）による遥拝方向に着目した分析法を参考に、社殿（拝殿）の前面の地点を各神社の遥拝点とした上で、参道起点から遥拝点までの軸および遥拝点から遥拝方向に沿った神社後背地への軸に沿った縦断線形を代表的指標として設定した。

### (4) 景観構造解析

高格社4社およびローカル神社群141社を対象に、基本的な歴史・変遷を把握して大きな立地や土地形状等の変化の有無について確認した上で、国土地理院の基盤地図情報における10m・5mメッシュ数値地図（標高）その他地図情報を用いて、上記指標を中心とした景観構造の解析をGIS（ArcMap9.3.1等）により行った。同時にすべて現地調査を行い現況の景観を記録するとともに数値地図等との整合等について確認した。

### (5) 考察

神社の立地環境の景観的構造的な多様性をいくつかの類型として整理した。またこうして抽出された特徴をその他既往の文化的景観や都市景観に組み込んでその保全を図るための方法と課題についても考察した。

## 4. 研究成果

### (1) 「鎮守の森」概念について

文献調査にもとづき、「鎮守の森」という用語は、明治中期に西欧文学の影響のもと、ある視点からの農村のパノラマ的風景の点景としてのランドマークを示す風景の描写を意図し創案された語彙として創出されたこと、これが明治40年ころまでには神社の存在そのものの意味に拡大・展開し、かつ神社の伝統性や神聖性を象徴する言葉として社会的に定着していったことなどが明らかとなった。これらのことから、森そのものへの評価は近代以降に定着したことが確認された一方で、地域の景観要素としての神社の重要性が確認された。

### (2) 高格社の事例にみる景観構造の特徴

#### ① 広瀬神社（奈良県河合町）

広瀬神社が奈良盆地西側中央にあつて、地名が示すとおり佐保川、大和川、飛鳥川など盆地を流れる河川の合流点にあることはよく知られているが、その参道軸と遥拝方向に着目すると合流点を遥拝するよう設定され

ており、地形としては軸方向に下降していく特徴が明瞭である（図1）。

②石清水八幡宮（京都府八幡市）

男山と呼ばれる丘陵上に位置する石清水八幡宮は、広瀬神社と類似して、京都盆地を流れる河川の流出口として、桂川、宇治川、木津川の合流点（以下淀川となる）を遥拝するように立地している。参道は京都方面から山麓より南向きに丘陵を上がるが、後に反転して河川合流点方面が背面になるよう参道と社殿が配置されている。縦断地形は広瀬神社では漸減していくのに対して、当社では参道においては100m程度の比高を上り、遥拝点後背ではその高度を見下ろすような特徴を有している（図2）。

③宇佐神宮（大分県宇佐市）

宇佐神宮は上記石清水八幡宮の勧請元でもあるが、当社は明確に南東方向の御許山が

神体山とされている。しかし実際の遥拝は概ね反対方向に面し、御許山から流れる寄藻川の低地を向き、社の縁起の一つには川と社殿間の菱形池も関わっているため当社も低地遥拝に関わるとみられる。参道は寄藻川手前が起点となり、川を渡って小丘陵を上がったところに軸にほぼ直角に折れて低地方向に社殿が配置される。この軸に対して一旦上がり下方を遥拝する石清水と類似した縦断線形といえる（図3）。

④氷川神社（埼玉県さいたま市）

武蔵国一ノ宮氷川神社は埼玉・東京に集中的に分布することが知られる氷川神社の中心である。当社は起伏量としては小さい大宮台地内に存在し、近世に新田開発された見沼という長大な低湿地に関わることは既に知られているが、参道・遥拝軸との関係でみると、2kmにおよぶ長い参道に沿って、大きくは台地を緩く上がる過程で社殿の前後に見

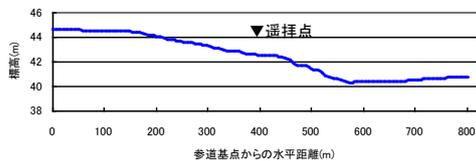
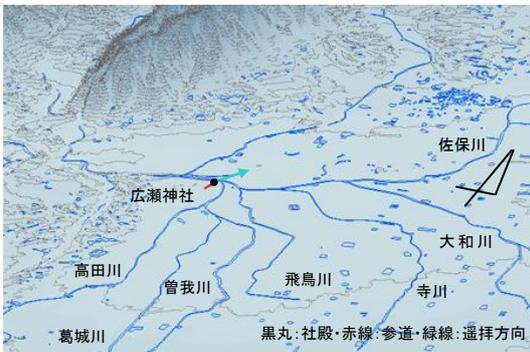


図1 広瀬神社の立地と景観特性

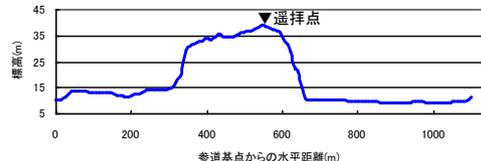
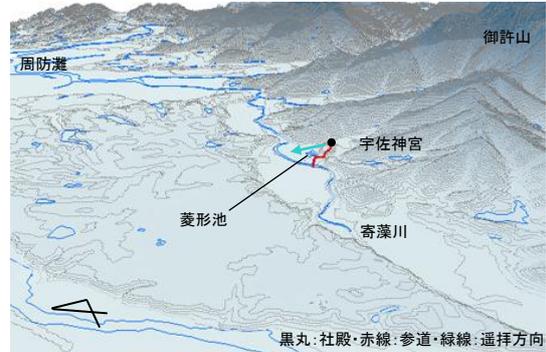


図3 宇佐神宮の立地と景観特性

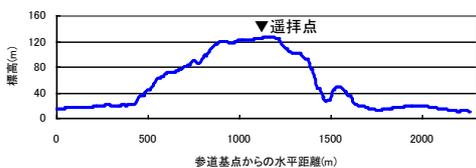


図2 石清水八幡宮の立地と景観特性

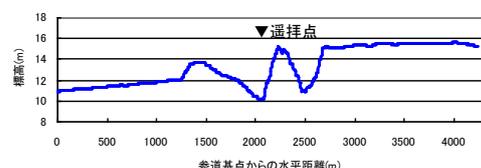
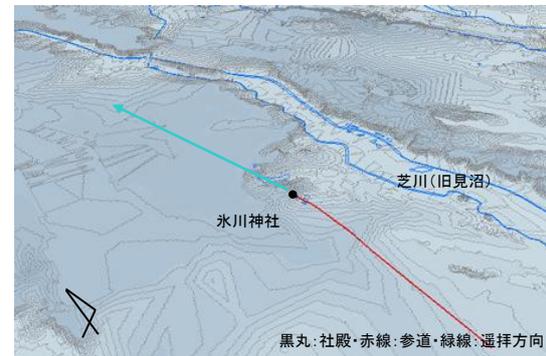


図4 氷川神社の立地と景観特性

沼の一端とみられる低地（現在は池）があり、参道として一旦下がり池を渡り、再び上がる（高鼻という地名である）が社殿（遥拝点）となり、後背にまた池を擁するという縦断地形の構成となっている（図4）。

⑤まとめ

事例数が限られているため結果を一般化・類型化することは尚早であるが、低地を遥拝する神社にも遥拝対象として河川合流点（広瀬、石清水）や池沼（宇佐、氷川）などの多様性があることがわかった。また参道の配置や縦断地形の検討から、低地に対して直進し漸次下降するもの（広瀬）、直進し漸次上昇しながらも低地が変化点となるもの（氷川）、参道の曲折を伴いながら参道としては上昇し遥拝は下方に向けられたもの（岩清水、宇佐）などがある。

(3) ローカル社群事例にみる景観構造の特徴

①調査対象

前述の氷川神社を含む大宮台地一帯のうち、さいたま市北区・大宮区・見沼区・中央区・浦和区・緑区・南区内で 1/25,000 地形図に記載されている全神社を対象とし悉皆調査を行った。ただし、極端にスケールの異なる前述氷川神社は対象外とし、また存在が確認できないか立入不能の5社および昭和期の創建になる2社を除いた計141社を対象とした（図5）。

②遥拝軸上の縦断地形

高格社と同様に遥拝軸上の縦断地形の特性からの景観構造分析を行った。その際に縦断面の区間の距離範囲として、参道スケールに着目し、参道起点から遥拝点までの距離と等距離を後背方向に延長した「参道距離相当範囲」と、参道距離は多様なためむしろ周囲からの神社のランドマークとしての特性に着目し、近景域の中央付近までの距離を想定し、参道軸・遥拝軸に沿って前後一律150mの距離範囲とした「近景相当範囲」の二通りを設定し、それぞれにおいて遥拝点前面と遥拝点後背における平均勾配を求めた。このときにそれぞれの土地が傾いているかどうかはその勾配を人間が体感可能かについての考慮が必要なため、傾斜の有無を勾配 0.5～3%の閾値を段階的に設定して判断することとした。

その結果、どのケースにおいても全体に割合の多いのはすべて平坦である場合であったが、それに次いで遥拝点前面では上昇、背面では下降する地形が特徴的であった（表1）。また前後の勾配の組合せをみると、遥拝点前面は平坦もしくは上昇し、背面では下降するという組合せが特徴的に多くみられた（表2）。さらにこの組合せについて量的関係を見る

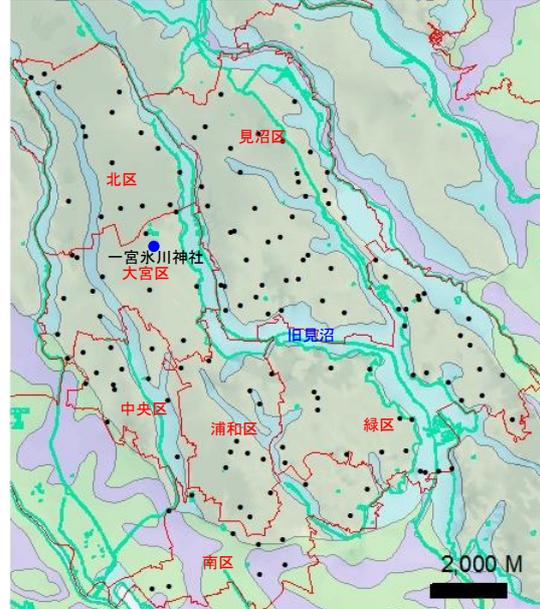


図5 調査対象神社分布（ページ部：台地地形）

表1 遥拝点前後における縦断勾配

検証範囲	傾斜閾値	上昇	平坦	下降	
参道距離相当範囲	3%	前面	32 22.7%	107 75.9%	2 1.4%
		背面	9 6.4%	110 78.0%	22 15.6%
	2%	前面	38 27.0%	99 70.2%	4 2.8%
		背面	14 9.9%	96 68.1%	31 22.0%
近景相当範囲	1%	前面	56 39.7%	74 52.5%	11 7.8%
		背面	25 17.7%	74 52.5%	42 29.8%
	0.5%	前面	21 14.9%	115 81.6%	5 3.5%
		背面	10 7.1%	113 80.1%	18 12.8%

数字は事例数

表2 遥拝点前後の勾配の組合せ

検証範囲	傾斜閾値	昇-昇	昇-平	昇-降	平-昇	平-平	平-降	降-昇	降-平	降-降
参道距離相当範囲	3%	6	16	3	93	11	1	1	10	0
		4.3%	11.3%	2.1%	66.0%	7.8%	0.7%	0.7%	7.1%	0.0%
	2%	8	18	6	76	17	2	2	12	0
		5.7%	12.8%	4.3%	53.9%	12.1%	1.4%	1.4%	8.5%	0.0%
近景相当範囲	1%	19	17	5	53	16	4	6	20	1
		13.5%	12.1%	3.5%	37.6%	11.3%	2.8%	4.3%	14.2%	0.7%
	0.5%	5	8	5	101	9	4	1	8	0
		3.5%	5.7%	3.5%	71.6%	6.4%	2.8%	0.7%	5.7%	0.0%

数字は事例数

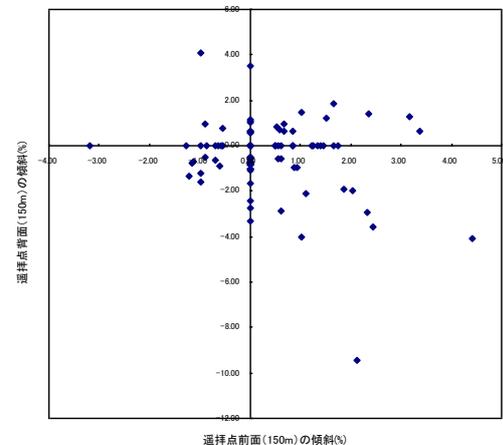


図6 各神社の遥拝点前面と背面の勾配の関係（近景相当範囲・傾斜判定閾値 0.5%の場合）

と、後背部での下降（y 軸の負）方向での拡がり大きい傾向がみられた（図 6）。

### ③神社の立地と集水域の関係

次に神社の立地は水系と密接に関わることが想定されるため、地形データから集水域を求め、遥拝点、参道起点、遥拝点から遥拝方向に参道距離と等距離に求めた後背部それぞれの平面的な位置関係について検証した。その結果（表 3）、遥拝方向が集水域の内側（中心方向）に向くタイプと外側（外縁方向）に向くタイプのそれぞれが認められたが、そのうち内向きの場合には参道起点と遥拝点が別の集水域に、外向きの場合には遥拝点と後背部が別の集水域にあるケースが特徴的にみられた（図 7）。これは神社が各集水域の辺縁部近くに立地しやすい傾向を示すも

表 3 集水域と神社の立地

参道起点および後背部の位置と遥拝点のある集水域との関係					
	両点域内	後背部域外	基点域外	両点域外	計
集水域に対する遥拝点での遥拝方向	31	0	24	0	55
内	56.4%	0%	43.6%	0%	100%
外	53	22	7	4	86
	61.6%	25.6%	8.1%	4.7%	100%

数字は事例件数



図 7 集水域（色分け部）と神社の立地

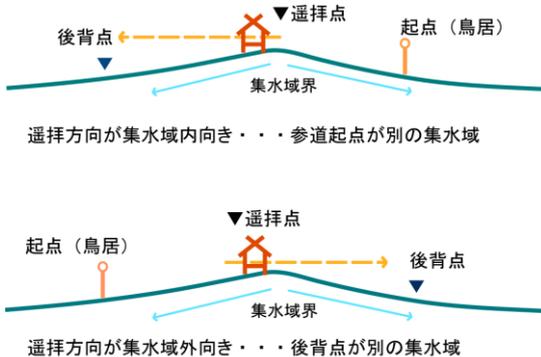


図 8 神社の立地・遥拝方向と集水域界

のといえるが、先にみた神社に向って上昇して後背部が下降する景観の特徴はこのような水系との対応からも説明が可能であることが示された（図 8）。このことは神社が単にランドマークや遥拝対象としての自然とかわり指標とにとどまらず、自然環境とのより基底的関係性を知ることのできる指標としてその価値の保全の意義が高いことを示すものと考えられる。また同一集水域に複数神社があるケースは 1 割に満たなかったが、このことから水系の広がりや神社相互の立地についても対応関係があることが伺われた。その際、二つの神社が同一集水域にある場合においても、集水線を挟んで神社が分かれて立地している傾向にあることもわかった（図 7 右下）。

### (4) 考察

本調査を通して、歴史の中で土地の起伏は開発等で平滑化されているものの、基本的には現状の地形に基づく分析によってもなお、神社の立地が微地形に対応していることを一定度示すことができた。神社の背後に神体山があるような立地については既に広く知られているが、これと反対の位置関係にある低地・水系との関係についても多様な形態があることがわかった。水系との関係としても従来は山口神社・水分神社など山地と盆地の境界部の立地形態は知られていたものの（前掲樋口 1975）、盆地の出口の河川合流部や比較的平坦な台地地形内での池沼との関わりについて事例を得ることができた。

特に抽出された一つの類型として特徴的であったのは、低地を遥拝する形態として、参道に沿って縦断線形でみて上昇ないし平坦にアプローチし、遥拝点となる社殿後背部は下降するタイプであった。これはまず神社が前面からも背面からもランドマークとして非常に認識されやすいことがこの地形上の立地とも関わっていることを示唆するものである（図 9）。このことから、いわゆる「鎮守の森」として集落・地域のランドマークになるような神社の立地には微地形が重要な役割を果たしており、その保全が歴史的風致の維持の基礎的な検討事項となることを指摘することが可能である。

その一方で、社殿後背部に低湿地を擁する神社一帯の環境については、その開発圧力に対する脆弱性が指摘できる。元来、低湿地は河川の氾濫原であることも多くこうした土地が耕作地となり、水害から安全な若干の高台に集落が形成されその端部に低地を遥拝するように神社が成立したケースが多かったことがローカルな神社群の調査から伺われた。しかしこうした低湿地が近世においては新田開発を進め、近代以降は工業化ないし宅地化が展開されてきたのが歴史の過程で

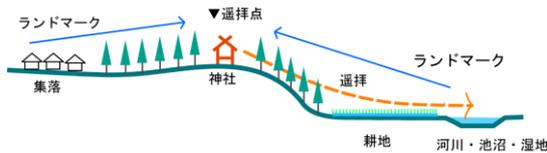


図9 本研究で抽出された神社の立地の景観構造

ある。背後に神体山を擁するような神社においては今なお禁伐林であることも多く、比較的その環境は維持されてきているのに対し、低地遥拝型の場合は、遥拝対象となる低地の価値はほとんど認識されないまま、開発も容易であったため、現状ではその関係が全く認識されていないに等しい(図10)。



図10 神社後背地に進む開発

(さいたま市緑区大門神社)

低湿地の価値については近年生態学的な観点からは着目が高まっているが、歴史的な土地自然との関係のあり方全体により目を配るべきであると考えられる。人口減少が予測されるなか、これからの都市および農山村での居住や産業のあり方の大きな考え方が求められているが、その一つにエコロジカルな観点にとどまらない低地への着目、低湿地の再生などの議論が求められる。

なお、本研究では高格社における参道周辺の街並みとの関係、ローカル社における集落立地との関係にまで踏み込んだ景観構造の調査研究には至らなかった。制度としての歴史的風致維持の有効な機能のためにはこの方面の知見を蓄積することも求められ、今後の課題と位置づけられる。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

- ① 小野良平、用語「鎮守の森」の近代的性格に関する考察、ランドスケープ研究、査読有、Vol. 73、No. 5、2010、671-674
- ② 小野良平、ランドスケープからみた都市

の河川と地域、都市公園、査読無、No. 191、2010、2-5

- ③ 小野良平、里の森林風景、ランドスケープデザイン、査読無、No. 76、2010、88-91

- ④ 伊藤弘、護りの森林風景、ランドスケープデザイン、査読無、No. 77、2011、90-93

[学会発表] (計3件)

- ① 小野良平、風景・環境の文化的側面の資源性、日本造園学会、2009年5月23日、明治大学
- ② 小野良平、用語「鎮守の森」の近代的性格に関する考察、日本造園学会、2010年5月23日、名城大学
- ③ 小野良平、自然環境と折り合う集住のあり方、日本造園学会、2011年11月12日、東京農業大学

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

小野 良平 (ONO RYOHEI)

東京大学・大学院農学生命科学研究科・准教授

研究者番号：40272439

### (2) 研究分担者

伊藤 弘 (ITO HIROMU)

東京大学・大学院農学生命科学研究科・助教

研究者番号：60345189